

KATSUYA

ISE

伊勢 克也

女子美術大学
短期大学部 造形学科
デザインコース 教授





1



2



4



3



6



5

7



イメージのマカロニ

アルタミラの洞窟の奥に絵画以前に描かれた「マカロニ」と呼ばれる屈曲線があるといます。数年前のある日、その「マカロニ」によく似たものが僕の頭の奥のほうから紙の上にぼろりとこぼれ落ちました。興味を覚えた僕は、さっそくそれを清潔なシャーレの中で培養し、観察を始めました。なにせ二万年前の代物です、観察者としても純粋な精神と感性が必要とされます。不思議なことに、それは、日常の些細な出来事に反応し形を変えていくのです。

この訳のわからない文章は1990年11月に「イメージのマカロニ」というタイトルの個展を開催した時のものです。そして、その時に出版した同タイトルの本のメにこんな結論が添えられています。

- ・「イメージのマカロニ」は形を持たない。
 - ・「イメージのマカロニ」は形を変える。
 - ・「イメージのマカロニ」はスケールを持たない。
- そして「イメージのマカロニ」は尻軽だ。

今、僕はこの「マカロニ」を回顧しているのですが、回顧したらやっぱりこういうことよねっていうことでこの場をかりて再掲載することにしました。最近、イラレとか使ってベクターデータで遊んでいる時によくこのメを思い出すんですよ。「言い得て妙、、」そう思いませんか？

2025年11月 良夜 伊勢克也

- 1 『Macaroni』 1990 自費出版
『家について』 2005 立花文穂プロ
『FOIL/VOL.3 自然 / 伊勢克也』 snoozer8月号増刊
2003 リトルモア
- 2 「家」 インスタレーション
2006 紙 / 木片に薔薇の花から作ったインク、ブロンズ、
カフェ chef-d'oeuvre 大版
maca_mallet Plane Kate
2019 45×240×320mm ブロンズ
- 3 Micky Mouse
1984 1300x1630mm パネルに紙 アクリル
- 4 maca_knitting Wearable Body
2022 30×800×2000mm 毛糸
model: YUKI photo Ryu Tamagawa
- 5 maca_knitting Wearable Body
2022 部分
- 6 maca_knitting Bonehead
2022 300×300×800mm 毛糸
- 7 maca_lost-wax
「鹿の頭と座っている人を同時にイメージしてみる」
1990 30×120×270mm ブロンズ
- 8 maca_lost-wax「今日嫌なやつに会った」
1990 30×120×220mm ブロンズ



8

9

イセサンの冬休み

立花文穂（アーティスト）

ある夜、月あかりに照らされてイセサンは冬眠から目を覚ましてしまします。お家のなかのひとは眠っています。パチンと手を叩いてみまが音は鈍く大きく響きました。ピクリともしません。窓は灰色に曇っていても外は見えないし扉も凍って開きません。階段をのぼって屋根裏から外に出ようとすると雪で滑って転がり落ちてしまいました。

気がつくときそこは見たこともない学校のです。イセサンが学校のなかを歩いているとなんだかおかしくな格好をした女の子に出くわします。月まで線を引くのとその子は言います。そんなことできるのかなときもんに思いましたが、月に行けるのならたのしいやとイセサンはいっしょに線を引き続けました。

またある時は、わははわははと笑いながら向こう側の廊下を走って通り過ぎていく女の子を見かけます。わたしは大きな文字を転がして針金で細工した大きな球体を転がしながら走っていきます。追いかけてイセサンもいっしょになつてわははわははと球体を転がして走り回ります。わははわははアハハ。

そしてまたある時は、うまくおしゃべりできない女の子があらわれます。テラコッタで人のような動物のような植物のようなこの世の生きものとは思えないものをこしらえて茶色や青色やカラフルな色を塗りたくっています。イセサンはだまづとなりでねん土をこねてお手伝いをしました。そしてしてこんどは、じぶんよりも年上のおばあちゃんがたくさん

いる教室に入ります。イセサンは机を集めてひとつの大きなテーブルにしました。その上に編みかけの毛糸や毛糸玉をいくつかけ放つて置きました。おばあちゃんたちはめいめいに袖だか胴体だかなんだからわからない編みかけの毛糸の続きをします。大きなテーブルを囲んでおばあちゃんたちは指さきを動かしながらあでもないこうでもない会話のはじまりました。イセサンは嬉しそうに机に肘をついて聞いています。みるみるうちに編みかけの毛糸は大きくなってセーターやスボンや手袋やくつ下やばうしなんかがついてた得体の知らない編みものが出来あがりました。イセサンはそれを着てニコニコ踊っています。

イセサンとお話したい子たちが列をつくっていたこともありす。だれとも出会わないときはベンチに座つてあたまの奥のほうから零れてくるイメージを手帳に落書きします。途中、すじみちを立てるのがじょうずな友だちのガビンを連れてきます。イセサンがひとりて困っているとときに助けてくれました。どこで見つけたのか頼りないフミオもイセサンが連れてきたなまのひとさ。でもいつのまにかふたりともどこかに行っちゃった。

イセサンは見たことも会ったこともない星の数ほどのひとたちと出会い過ごしていたらまた眠くなってきます。

ながいながい冬は終わり、窓から差す太陽の光でイセサンは目を覚ました。ぼうつとしてしばらく天井を見つめます。まだここがどこかわからない。それはそうです。30回もの冬を越していたのですから。むつくと起きあがり周りをみるとお家のみんなはごはんをつくったり歯磨きをしていてイセサンが知っているあたらしい朝です。イセサンは、なにかとも無かつたようにもぞもぞと蠢きだしてじぶんの工房でひとりなにかをつくりはじめています。出会ったひとたちの数多の結晶に囲まれて。つくめることは生きることなのさ。

なっていく。ホレボレしちゃうね。

近年の、編み物作品。アレを最初に見た時はビックリしましたが、アレもまた伊勢克也という運動体を見れば首がもげるほど頷ける作品なんですよ。ドローイング作品ですよ。

糸は線であり、線が実体化したものが糸・毛糸。その糸を、自分の手元にまざしく手繰り寄せてゆつくりとヨレヨレと線を引いていく。しかもその線が、やがて人の形のようなものになっていく。それは伊勢克也の脱皮したホヤホヤのフラジャイルな皮のようにも見えるし、一方で伊勢克也がドローイングの魔術で産み出そうとした人造人間のようにも見える。

ドローイングというのは、線を引くことで生命のなにかを生み出そうとする行為でしょう？ あ、デキトーなこと言っちゃったかもなんだけど、インゴルドがなんかそういうこと言ってたと思います。線を引くことは、生命が動きながら描く軌跡。生命の運動の記録である、とかなんとか。

伊勢さんのやっていることは、ヒジョーに一貫性があるんだよね。生々しく、なにかを生み出しながら動く生命体であるということ。ナマモノ＝生物なの。だから時々心配にもなる。ズル剥けで寒風にさらされた局部や、傷口から見える臓器のようなものを思い浮かべてしまう。伊勢さん！チャック開いてますよ！と言いたくなる気持ち。同時にたいへんおくゆかしく、おしゃれなところもある。

僕は、伊勢さんに、不相応にかわいがっていただいたと思うのだけど、それが自信にもつながったんですよ。俺はこんなだけど、伊勢さんがかわいがってくれるということは、自分にも少しはなにかあるのかもしれないな、と励まされてきたんです。

いつもありがとうございます。酔っ払って怪我しないようにお願いしていきたい！ 作品も生き様もずっと見ていきたいから。

わたしにとって、この時間は、伊勢さんには面と向かって言えませんが、宝物です。

書き記すことはできないと言ったものの、もう少し書くべきだろうと思うので、書き進めます。伊勢さんのやっていることは、いわゆる美術史の中では捉えにくいことなんだろうと思いますが、わたしの中では実に明快です。伊勢さんの作品を見る時、わたしの頭にはいつも「ピュシス」っていう言葉が思い浮かびます。ピュシスは、ややこしい言葉で、通常「自然」と訳されるんだけど、同時にネイチャーとはまったく違う意味だとも思います。もともと意味は「自ずから生じ、生成し、成長し続けるもの」みたいな意味だっつーことです。なんつーか「内側から生まれ続けるもの」としての「自然」みたいなものとしてわたしは捉えています。花が咲いたり、水が滔々と流れたり。ひとがゆつくりと老いていったり。そういう意味での自然。

ネイチャーは時々、人の作るものと対比して語られます。アートとネイチャーね。アートネイチャーって自然を目指した人工物なんだろうね。まあ、それはいいか。

だが伊勢さんの作るものたちは、どれも、これも、自然と人を対比しているわけじゃなくて、自然に身を寄り添わせているんですよ。『マカロニ』のシリーズはそれが目に見える形だったと思うのだけど、それ以降も、実はぜんぶそうなんですよ。

伊勢さんが、小さな家を作る。紙だったり、ブロンズだったり。それがたくさん集まって、集落のようなものができあがる。これはすべて、伊勢さんの内側から生まれてくるもの（ピュシス）なのだと思うのです。神の視点で作られた都市ではなく、アノニマスな、ひとつひとつの家が集まって発生した集落。自然と対峙し支配しようとするのではなく、生活者が自分の快適さを求めつくった家が集落になっている。それがひとつのイキモノに

内から生まれ続けるもの

伊藤ガビン（編集者）

伊勢克也さん、を語るのは難しいです。どのように難しいかを書くことさえ、憚られる。

伊勢克也は、ナマモノなんですよ。こう考えてみましょうか。魚市場で、いや違う、釣りに行ってね、そして期待もしていないのにむちゃくちゃ旨い魚が釣れてしまった。この時、「あー、この魚はね、すぐにこう捌いてこうしてあして食べるとむちゃくちゃ旨いのよ」とくどくど説明しだす人がいたとしたら、おい！それを語る前に喰らいつけや！ということになるじゃないですか。伊勢克也という存在は、そのくらいいつもナマモノで。新鮮で。だから語る言葉は追いつかないんですよ。ほら、市場にさえ出回らない、港でしか食べられないとか、漁師しか知らない魚の味があるじゃないですか。そういう存在なんですよ。

幸いにしてわたしは、伊勢克也さんと、同じ大学で、同じ共同研究室で、長い時間を過ごさせてもらいました。そうなの。だから。水揚げされたばかりの伊勢海老ならぬイセカツを見ることができたのです。いいでしょ。

紙で小さな薔薇色の家を作るイセカツや、小さな蠟のチップを使ってブロンズ作品の原型を造形するイセカツを間近に見ることができました。また教育者として、学生たちの中に眠る、まだ誰も気づいてない光のようなものを、興奮しながら丁寧に取り出す動きを目撃しました。心霊手術のような手つきで、学生さんたちの体の中から光を取り出す様を見ることができました。

女子美術大学 短期大学部
造形学科 デザインコース 教授
伊勢克也
Katsuya ISE

- 1960年 岩手県盛岡市生まれ
- 1984年 東京藝術大学 美術学部 デザイン科 卒業
- 1986年 東京藝術大学 大学院美術研究科 修了 芸術学修士
- 1984年 日本グラフィック展 大賞
- 1993年 東京タイプディレクターズクラブ 会員の部 銀賞
- 1996年 女子美術大学短期大学部 専任講師
- 2006年 女子美術大学短期大学部 教授

個展／グループ展 多数

【作品収蔵】
東京藝術大学、横浜市緑区、
G foundation collection Tokyo

【著書】
『Macaroni』（1990）
『FOIL Vol.3 伊勢克也 NATURE/自然』（2003）
『家について』（2005）
『家家』（2008）



【スペシャルサンクス（敬称略）】 DNP大日本印刷株式会社 G foundation collection Tokyo 浅葉克己デザイン室 中谷芙二子 水竹康夫 磯辺綾子 下吹越武人 石原延彦 日比野克彦 榎本た壱 松浦弘明 伊藤ガビン 立花文穂 照沼佳佳子 岩根扶実 玉川 竜 江田由美子 女子美術大学日本画研究室 畑ユリエ そして、作品を貸し出していたいたくさんの皆様 ありがとうございました。

2025年度
女子美術大学退職教員記念展

2025年11月26日(水)ー12月20日(土)
12月6日(土)、13日(土)、日曜休廊 10:00ー17:00
入場料無料
女子美ガレリアニケ

Joshibi Galleria
N I K E

2026年1月7日(水)ー29日(木)
日曜祝日休館 10:00ー17:00(入館は16:30まで)
入館料無料
女子美アートミュージアム

JAM
JOSHIBA ART MUSEUM